

追悼の辞

2014年8月17日、専修大学文学部日本語学科の加藤安彦教授が逝去されました。享年58歳でした。2012年からの学科長の任期ももう少しで満了となる2013年の初冬に体調をくずされ、校務を休んで病気の治療に専念しておられたところでした。復帰されるのを待ち望んでいた夏期休暇中、突然の訃報に茫然としたことが思い起こされます。

以下、哀悼の思いをこめてご研究やお人柄の一端を紹介いたしますが、つきましては、かつて同じ日本語日本文学科に所属し、日本語学科と日本文学文化学科に分かれてからも多くの会議でお隣に座り、互いに「さん」付けで呼んでおりましたことから、本文でも「加藤さん」と書かせていただきます。

加藤さんは2003年に文学部教授として着任されました。その前は、独立行政法人国立国語研究所に勤務し、研究開発部門第一領域長をつとめておられました。コンピューターを用いてデータを蓄積し分析することは、アルファベットを用いている西洋語圏においては早くから行われていましたが、それとは異なる日本語の情報処理には困難がともなっていました。そのような状況のなか、加藤さんは日本語学研究においていち早くコーパス（電子化された大規模テキストデータ）作成の必要性を提唱し、日本国内におけるコーパス構築の指導的役割を果たしてこられました。帰納的方法によって大量のデータから客観的な成果を導き出すことが、加藤さんの日本語学の一貫した姿勢であっ

たと考えられます。

その方法論が日本語学科の授業でも活かされていたことは言うまでもありません。学生たちが友人と携帯電話でやりとりするメールでコーパスを作成し、そこにどのような特徴（顔文字の種類や用法、さまざま表現の実態）や経年変化が見られるかを明らかにしようとされていました。それを他大学の研究者のデータと統合することも構想されていたそうです。学生にとって身近なものである携帯メールを資料として研究するゼミナールでは多くの学生が日本語学のおもしろさを知り、大きく成長して巣立っていきました。加藤さんは学生から厚い信頼を寄せられた先生でもありました。ときには勉強のしかたや卒業論文のテーマなど通常の範囲を超えて、卒業後の進路や人間関係など学生の個人的な問題や悩みの相談に親身になって応じ、深い共感をもって学生の話に耳を傾けておられたと仄聞しています。

次に、私事にわたりますが、わたくしは近年翻訳の仕事をする事が多く、つねに加藤さんが編者の1人である『講談社類語辞典』（2008年）を座右に置いています。訳語や表現に迷うたび、加藤さんに相談するような思いで、この辞典を活用してきました。そういう意味では、これからも加藤さんにお世話になります。もちろんこれはわたくし1人のことではなく、多くの人たちが加藤さんの恩恵を受けつづけることでしょう。

また、先にも述べましたように会議で同席することも多かったのですが、加藤さんがお隣におられるだけで何か安心感がありました。加藤さんは、豊かな日本語の知識に由来するものなのでしょうか、独特のユーモアのセンスを発揮され、いつも楽しい話題で場をなごませておら

れました。とは言っても、加藤さんはそのおおらかさの背後に、繊細さや敏感さを隠しておられたようにも感じます。言葉の微妙な差異についての該博な知識が、他者のこまやかな感情に対する理解につながっていたのではないかと推察されます。そのようなお人柄が多くの学生や同僚から愛されていたのではないのでしょうか。

いろいろな意味で大きな存在であった加藤さんがもうおられないという喪失感は、なかなか薄れることはありません。哀悼の思いは尽きませんが、以上をお別れの言葉とさせていただきます。

加藤さん、どうぞこれからも遠くから、わたしたちを見守っててください。謹んでご冥福をお祈りいたします

2015年3月

専修大学文学部長 廣 瀬 玲 子